

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3390101677		
法人名	医療法人よつば会		
事業所名	グループホームメディフル藤田 (花・空ユニット共通)		
所在地	岡山市南区藤田1134-2		
自己評価作成日	平成28年9月9日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigekensaku.jp/33/index.php?action_kouhyou_detail_2016_022_kani=true&JigyosyoCd=3390101677-008&PrefCd=33&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	有限会社アウルメディカルサービス		
所在地	岡山市北区岩井二丁目2-18		
訪問調査日	平成28年9月20日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者一人ひとりを大切にする思いを原点到、認知症ケアの理念を掲げ、その理念は全職員共有できている。限られた人員配置の中で、職員の責務は決して少なくはない。職員のやりがいや向上心とストレスや負担とのバランスを保つことは良いケアの継続の重要なポイントである。ケアの専門性は、決して利用者を介護される側と一方的な立場に置かず、人生の先輩であり、共に暮らす生活者としての意識から始まる。項目一つ一つについて、丁寧に取り組んでいいるが、まだ十分でない面も多い。自分たちのあり方を常に振り返りながら、利用者そしてご家族の安心、安全につながるサービス提供に向けて取り組んでいきたい。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

地域の日常的な支援や運営推進会議に地域からの参加が多いこと、入浴の回数や時間・生活時間の設定等に利用者の思いや意向を取り入れることなど、事業所の理念である「ホームに安心し、地域に安心し、そしてスタッフに安心して心穏やかな生活を送ることのできるホームを目指す」が随所に表れている。また、家族や利用者が思いを出しやすい聞き方に心がけ、介護計画にもそれを反映するなど利用者本位の運営がされている。職員の内部研修のレポートには、全員が「今後、活かそうと思う点」を記述する欄があり、研修と日々のケアが直結している。利用者には笑顔があふれ、一人ひとりが役割を持って穏やかに暮らしている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	年度初めに倫理、ケア理念の確認を内部研修にて実施しており、日々のケアには浸透してきていると感じる。しかし、地域密着型サービスや地域包括ケアシステムの意義、重要性への意識はまだ薄い。	玄関に理念を掲示するとともに、4月及び採用時の研修において確認し共有している。また、日々のケアや申し送り時にも確認し、実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	町内会へ属し、地域での会議、清掃活動に代表職員が参加している。また夏祭り、サロンへは利用者と共に参加を続け、地域の商店や米屋を日常的に利用しているが、その利用者は限られている。また職員の意識も拡げる必要がある。	町内会に加わり、清掃活動や愛育委員会等に職員も参加している。利用者も小学校区の夏祭りや地域サロンに定期的に参加し、地域と交流している。婦人会の慰問を受けたり、花屋と連携して利用者が生け花をするなどの活動もしている。	地域とのつながりを生かし、保育所・幼稚園や小中学校にも連携が発展することが期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議の場で、地域の方々と共に学ぶ機会を設けてはいるが、推進委員に止まっているところもあり、地域全体への発信は十分とは言えない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に一度の開催機会は確保できており出席委員も多い。毎回活発な意見交換ができており多くの意見を頂戴している。常に客観的な意見として尊重し運営に反映できるようにしている。	民生委員・連合町内会長・町内会長・婦人部長・地域包括支援センター職員等が参加し、2ヶ月に一度開催している。内容は利用状況・行事の報告と計画・勉強会等である。防災訓練など実際に見ていただき、出された意見は防災活動等に反映している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市担当者との連携は管理者がこまめに行い協力関係は築けている。地域包括支援センターの地区担当者との情報交換をもっと現場サイドで積極的に行いたい。	統括管理者が岡山市の地域密着サービス運営委員でもあり、訪問を中心に日常的に連携している。地域包括支援センターとの日常的な連携も検討している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年一度の内部研修会で、身体拘束に当たる行為とそのリスクを確認し安易な拘束に至ることのないよう徹底している。しかし、安全を優先するがあまり「言葉での制止」場面はみられるのが現状である。さらに、玄関施錠についての意識も薄くなっていたため、改めて話し合い、意識を高めている。	年度計画による内部研修で学び合い、拘束の必要のないケアに努めている。日々のケアの中では、言葉で制止する場面もあることを意識して対処している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年一度の内部研修会で、虐待防止法の目的を確認している。自分たちの普段のケアが「不適切ケア」にあたってはいないか振り返りを行うとともに、介護技術不足によって傷つけることのないよう、技術向上も課題の一つとなっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	年一度の内部研修会で権利擁護や成年後見制度の基本を繰り返し学んでいる。日々の生活の中で「意思決定支援」の場面は増えているが、前項に関連し、安全優先のために倫理的配慮に欠けてしまったこともあり反省している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約や改定に沿った変更は、管理者とユニットリーダーが責任を持って文書と説明により締結している。説明者と同席者に分かれ、相手の表情をみながら不安や疑問がないか確認しながら行えるようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者や家族の願いや要望は、言葉で現せないことも多い。気づいた点や気になった点として発信しやすいよう、日頃より積極的にコミュニケーションを図り、何気ない発信を感謝とともに大切に受けとめ即共有していくよう努めている。	利用者とは日々のケアを通して、家族とは面会時等に意見の把握をするよう努めている。出された意見は、職員間で情報共有し、反映していけるよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者(理事)と職員は定期的に面談を行い、就業や業務内容など全般にわたる満足度、不安などを確認している。個別、全体の課題を整理し反映できるものは改善、困難なものはその理由や状況を説明できるようにしている。代表者へは管理者より随時報告を行っている。	職員一人ひとりの目標の進捗状況の確認と合わせ、管理者が年に4回の面談を実施している。また、申し送りや日々のケアを通して職員の意見を把握し、勤務条件等に反映している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	それぞれの事情や家庭環境により、勤務条件を見直し柔軟な対応が可能。勤務状況、実績を考課として昇給や賞与に反映している。人員基準ギリギリの体制が続いた時期は職員に負担をかけた。安定した人員体制の確保は事業所全体の課題。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	キャリアパスを取り入れ、職員個々の目標や到達のための取り組みを具体的に設定し、内外の研修会への参加、定期的な振り返りを繰り返し、キャリアアップを図っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者交流の場設定には至っていない。経験に応じた外部研修への参加により、その中で同業者との交流を図ることを促している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居への理解が困難な場合が多く本人の納得が得られず入居に至るケースが殆どである。入居直後は、そうした本人の不安や混乱を理解することから開始する。関わりを厚くし、本人の声に耳を傾けながら安心できる場(人・物・住)づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族は入居検討の際、要望、不安、自責などの様々な思いが入り混じっていることを理解し、その気持ちを傾聴することを重視している。一方で、求められるサービスと提供できるサービスに大きな差異がないか、十分な説明と納得に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居決定は本人、介護家族の状況から緊急性を重視する。しかし、金銭面、医療依存度なども含め、当ホームが適切か否か慎重に情報を収集し検討する。他サービスの方がより適切であると思われる場合は、その説明対応も行う。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	年配者を敬う気持ちを持った対応や、一緒に過ごす中で喜怒哀楽を共にすることはできている。しかしながら、本人にできる力が残っているにもかかわらず、その機会や場面設定ができないまま「してあげる」ことも多くなっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居によって、本人と家族の関係が途切れないよう、生活の様子や変化を常に伝えながら、居室の環境設定や本人への働きかけを家族に依頼することも継続している。ただ、これまでの関係性も考慮に入れながら、時間をかけ働きかけることも必要と思っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの場へ出かける機会を継続して設けていきたいが、限られた利用者や一時的になっている。情報収集の継続と、得た情報から継続した支援に繋げることが課題と思われる。また職員の意識向上も課題の一つ。	家族の協力を得ながら、長年勤めていた会社など、思い出の場所や自宅、スーパー等に出かけたり知人等の面会時には声掛けをし、関係継続の支援に努めている。意思表示の困難な人の情報収集に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ユニット間交流も含め、気の合う者同士と一緒に過ごせる場(機会)づくりに配慮している。そうした中で利用者同士が誘い合ったり、心配し合ったりする姿もみられるが、前項目同様一部に偏っている傾向はある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	転居による契約終了時は、転居先への情報提供を細かく行っているが、その後の様子確認は直後のみとなっている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	常に本人の願いや意思がどこにあるかを考えている。コトだけでなく、日々の生活場面の中で嗜好を把握したり表情や態度で現される感情から読み取るように努めているが、職員の一方向的な思いこみに陥らないことも必要と思われる。	日々のケアや作業の中で、利用者一人ひとりの思いや意向を把握するよう努めている。困難な場合は、生活歴等を基に本人本位に検討している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に、ご家族へ聞きとりと同時に書面での協力を仰いでいる。入居後ご本人の暮らしぶりから尋ねたり、想像したりしているが、すでに本人からは聞きとれず不十分な方も多いため、引き続き情報収集に努めていきたい。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	身体状況の変化を見逃さない力は向上しており、早期対応に繋がっている。できること・わかることの見極めることには、その機会の提供が必要なため、もう少しその場を増やしていきたい。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族の願いを大切にしながら、現状を正しくアセスメントし、必要な支援、優先順位をじっくり吟味しながらプラン作りを行っている。本人視点でのニーズや誰が読んでもわかりやすい計画書になるよう表現方法も意識している。	新規入居時には、情報を基に主任等が二人で面談し、1ヶ月の暫定案を作り、家族と連携している。家族にも伝わり易いよう、様子を工夫し話し合っている。確定したプランはカンファレンスを基に、一人ひとりの状況に応じて随時、見直している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	健康状態から日々の様子を個別に記録している。状況に応じ書式へ変更も行っているが、チェック表が多くなり漏れやケアに活かせず振り返りに至らないことも生じ課題は残っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	柔軟な発想から、事業所外サービスの活用も必要であるが、事業所による支援が殆ど。今後、家族、地域、行政、企業などあらゆる人や場を巻き込んだ支援を考えることが多機能化に繋がると思われる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の店舗や学校との関わりを増やしたいと考えてはいるが、特定の利用者や一時的なものに止まっている。前項目と関連し、日常的に活用することが求められると思われる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医院と密な連携体制が整っている。必要に応じ専門医への紹介や家族希望による医療選択もできるよう、医師から直接話を聴ける機会も設けながら支援している。	多くの利用者は、利用開始時に協力医をかかりつけ医としている。月に2回の往診と週1回の看護師の訪問があり、医療面での安心感を家族・利用者にもたらしめている。必要に応じて受診も実施している。歯科は希望による往診を実施している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	連携クリニック看護師の定期訪問があり利用者の健康状態を把握している。訪問時だけでなく日々の変化や気づきも随時連絡できる体制が整っており、必要時の受診へスムーズに繋がっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時の情報提供、入院中の様子確認、退院時の事前面会を行いながら、早期退院受入に努めている。また入院中のご家族の不安に対応できるよう連絡を取り合うようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や看取り体制については、入居時に説明を行っている。その後も利用者の状況に応じ、本人や家族の不安や希望に応えられるよう、医師も交えながら、随時話し合える場を設けながら納得のできる方向性を検討している。	利用開始時に事業所として出来ること・出来ないことを説明している。家族・医師・事業所がチームとして支援する体制を整え、豊富な看取り経験を持っている。看取りの振り返りで情報を共有をするとともに、直後の運営推進会議でも報告し地域と意見交換している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急蘇生やAEDの使用方法、感染予防について定期的に内部研修を行っているが形式的なものが多く実践に繋がるにはまだ不十分である。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域性から災害対策意識は高く持っているが、その準備としての勉強会や備蓄、訓練も年に1~2度と限られ、対策として十分とは言えず、利用者の安全確保に繋がる実践力はない。地域協力も含めた細かな取り決めと、繰り返しの訓練を行っていきたい。	年に2回、昼間と夜間を想定した避難訓練を実施するとともに、指定されている避難場所への避難訓練も実施している。	地域や消防署も参加する訓練の工夫が期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	重要性の理解はできており、年配者への言葉づかいも含め気をつけてはいるが、日々の何気ない会話の中に指示的な言葉となったり、排泄や入浴などプライバシーに関して配慮なく大声で話してしまったりすることもある。	居室は利用者個人の部屋であるという意識を共有し、一人ひとりの尊重とプライバシーの確保に努めている。日々のケアの中で職員の言葉遣いや対応について、考えたり振り返る機会をつくっている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人に尋ねる、表情を読み取ろうとすることは、常にできるようになってきている。今後は選ぶ、決めるという自己決定の視点で、尋ね方の工夫をしたり選択肢を増やしたり、また言葉で表出できない方への想像やくみ取りをより努めていきたい。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを大切にケアを実践している。「その人らしさ」が職員の決めつけになっていないか、の振り返りを継続していきたい。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	意識が服装選びだけに偏りがちである。清潔整容全般にわたり身だしなみを整えることが、その人らしさの第一歩でもあると捉え、職員の忙しさや気づきの薄さで不足してしまわないようにしたい。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食に対する意識は高く持っている。栄養摂取だけでなく生活の中の大きな楽しみとして捉え、嗜好や食べやすい形状、味の工夫なども一人ひとりに合わせて行っている。また、提供を待つだけでなく、買物や調理、準備なども一緒に行えるようにしている。	毎食、職員が手作りし、職員と一緒に和気あいあいと食べている。利用者の好みを取り入れたり、行事には仕出しを取るなどの変化も持たせている。食材選びの買物から下ごしらえや調理、食後の洗い物など、利用者も積極的に参加している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食は楽しみとして捉える一方、生命維持の基本であり、一人ひとりに応じた食事量、水分量の把握と提供に努めている。体調に合わせ、提供する内容、量、回数なども工夫している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	前年の重点目標として取り上げ、意識は高まってきた。三度の食後すべてにケアは介入できていないが、それぞれの口腔内の状況の把握はできるようになり、ここに応じた対応ができています。意識、ケアの継続につなげたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンに合わせ、トイレでの排泄に向けて誘導を促している。しかし、一方で使用する紙オムツが減らない現状もあるため、誘導の仕方、時間などの工夫をさらに検討する必要もある。失敗した際の不快感が長引かないケアは行っている。	声かけと誘導により、昼間は全員がトイレで排泄している。夜間は一人ひとりに応じた対応となっている。おむつから布パンツへの改善例もある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	「食べて、動いて、出す」という自然排便を目指しているが、内服に頼る方が多い。便秘は、健康だけでなく、精神的にも不快の原因になりやすいので、内服量や時間持合めた調整と、食事、運動とあわせて引き続き意識を持って取り組みたい。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	夜間入浴も含め、一人ひとりのペースに合わせた入浴ができている。入浴を「清潔保持」の目的としてだけ捉えるのではなく、楽しみやリラクセスを目的として、洗身、洗髪をしない場合もある。	利用者の意向で時間帯等を設定し、夜間に入浴している人もいる。一人ずつ湯を張り替える等の配慮もし、入浴が快適なものとなるよう工夫している。嫌がる人には、言葉かけ等に対応し清潔の保持に努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりに合わせた入眠、睡眠時間を意識しているが、入床、離床とも職員のケアのタイミングによる場合もある。 夜間の睡眠状況によって起床時間をずらしたり、昼間休息を促したりできている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	目的、用法、用量など、基本的な理解は全職員ができており、個々に応じた内服支援もできている。また変更時の情報共有も速やかである。しかし、内服後の状態観察や細かな副作用の理解については、意識、把握の差が大きい。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	「してあげると取り上げない」ことをケアの理念の一つに掲げ、家事や生け花、歌や踊りなどそれぞれの得なことを行う場面も増え日常的な活動として取り入れられるようになってきた。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	中庭や玄関先など外の空気に触れることはいつでもできるようにしているが、希望や願いに沿った外出支援は、まだ限られた利用者であったり一時的であったりしており、その幅や機会を増やしていきたい。	全員が中庭や玄関にはほぼ毎日、出て外気に触れている。日帰り旅行やドライブ、外食等の支援もしている。意思表示が困難な人への対応を模索している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買物時や受診時、自分で支払える機会を設けることが徐々に増えてきている。本人の力を改めて発見する機会ともなり、今後も継続して行っていきたい。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	今年度の重点目標としていることもあり、電話や手紙を書く支援が増えている。一部や一時的なものにならないよう今後も様々な形で取り組んでいきたい。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	家具の配置工夫や季節の花や装飾などにより、心地よく季節を感じられるようにしている。また、常時空調管理による適温確保ではなく、季節ならではの風、暑さ、寒さも感じられるよう工夫している。職員の声が、利用者にとって不快や混乱を招く音とならないよう意識する必要がある。	建物は平屋で日当たりと風通しが良い。温度や湿度・光等が適切に管理され、空気の淀みもなく清潔感にあふれている。玄関や廊下には家族の作品や利用者の生花等も置かれている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者個々の状況やお互いの関係性に配慮しながら、配置を変えスペース活用の工夫をしている。しかし、いつも同じ場所(席)で過ごす傾向もあり、配置して終わりではなく、適宜職員の介入、援助も必要である。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みの家具や日用品に囲まれて過ごせるよう、ご家族の理解や協力も得ながら設えている。今後は、本人の状況に応じ配置換えや品の追加、若しくは変更などを適切に行えるようにしていきたい。	入り口にプライバシーを保てる空間を作るとともに、各室に洗面台を設置し、利用者の利便性に配慮している。仏壇や椅子、家族の写真等が置かれ、その人らしい部屋となっている。夫婦で入居し、寝室を共にしている方もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	基本的なバリアフリー、手すりなどの安全配慮はできているが、個々の生活に合っているか否かは、その時々ADL状態や状況により変化するものである。その意識を持った工夫はまだ十分とはいえない。		